75

朝鮮時代侵襲的外科術の発達

○中佐燮[1]・奇昌徳[2]

朝鮮時代の医学は本草学、内科学分野の卓越な業績にもかかわらず、侵襲的外科術の分野は全く発達していなかったというのが一般的な考えである。最近もっとも優れた通史的業績と言うべきハンキル社刊『韓国史』全集にも朝鮮時代に〝解剖学または外科学の分野は全く発達できず、当時の東洋医学の特徴をそのまま反映している〟としている。このような見解によれば韓国の外科史は単に〝近代的な外科技術をもって西洋医学の伝来〟以後より始めたことになる。

しかし、一五五九年刊行された任彦国の『治腫秘方』を起点にして朝鮮末までに伝来された治腫学（外科・皮膚科学）発達の散発的痕迹―当時、治腫医らは士林と儒医らにより排斥され社会的に冷待を受けていた点を勘案すれば、明らかな痕迹―を接してみれば、このような考え方は誤解であることが分かるようになる。三木栄は任彦国流の治腫術、特に『治腫指南』を紹介しながら、〝この方法は普通の鍼医の術とは全くちがい、科学に根拠する観血的手技が加えられ極めて優れたもので当時の大陸外科学の水準をはるかに凌駕する〟と評している。

そのため演者らは現存する六種の専門治腫書を考察し、関連史料を総合して次のような結論を得た。

（一）朝鮮の治腫術は高麗朝、巫医系列の外科学などの呪禁業で蓄積された医療的経験は高麗朝の官医である僧医系列と混入され、儒教を国家指導原理と採択した朝鮮朝では民間医術に命脈を受け継いで切実な社会的必要性により歴史に再登場するようになった。

（二）民間医術に命脈を維持している間、治腫術は治療資源が不足し獣医学、軍陳医学に深く関与だけでなく、家畜と周辺の賤民らを対象にして幅広く治療的経験を蓄積しえたのは賤民階級により一層科学化されたのである。この過程において賤民階級の特徴的実用主義も治腫術に少なくない影響を及ぼしたのである。

（三）書記の治腫書は事実上秘方書で、巫家流の傾向が濃いが、一八三六年に刊行された李宣春の『瘍医微』にいたっては『東医実鑑』流の道家的プロフェッショナルが如実にあらわれている。これは治腫廳の設立（一六世紀）等を通じて制度化過程をはかった治腫術の姿で、一九世紀末西洋医術の導入以後二〇世紀中盤に至るまで韓医学及び民間医術の携帯でその痕迹が発見されるのである。

(1)ソウル大学校医科大学医史学研究室）
(2)素岩医文化史研究所）